大テロルの一側面

――一九三七年の地方指導部弾圧をめぐって――

内田健二

はじめに――問題の所在と史料および研究状況

一九三六―三八年のソ連は、通常、大テロル（あるいは「大粛清」）の時代と呼ばれる。この三年間に、かつて党と国家の最高指導部を構成し、スターリンと指導権を争ったジノヴィエフやカーメネフ、ブハーリン、ルィコフなどに対する公開裁判（いわゆる「三大裁判」）が組織され、すでに政治的に無力であった旧反対派は肉体的にも一掃された。同時に、一九五六年第二〇回党大会の席上、フルシチョフがスターリン批判の秘密報告において明らかにしたように、テロルの矛先は旧反対派のみならず、これまでスターリン体制を支えてきた指導者層にも向けられた。

よく引かれる数字を挙げれば、一九三四年の第一七回党大会で選出された党中央委員と候補一三九人のうち九七人（七〇％）が処刑され、大会代議員一九六六人のうち一一〇八人（五六％）が逮捕ないし処刑された。[1] 処刑された九七人の党中央委員と候補のうち、一九三七年から三九年までの三年間で処刑された者は九三名（約九七％）に達した。[2] 中級および下級の党員、活動家に対する弾圧も引き続き実行された。また、一九三七年六月のトゥハチェフスキー裁判に象徴されるように、赤軍幹部に対する弾圧も一九三七年以降拡大した。もちろん、労働者や農民に対する弾圧も激しさ

を増したが、大テロルはスターリン体制の中枢に位置する指導者層を中心的な標的にするという、それまでのテロルにはみられない特徴を帯びた。

このようないわば暗黒の政治体制を象徴するかのように、これまで、この時期に関する史料は極度に少なかった。たとえば、党中央委員会総会の様子も当時の『プラウダ』などでは知ることができない（ただし、地方の党委員会総会の模様は地方機関紙でかなりの程度、知ることができる）。しかし、ペレストロイカとソ連崩壊を経て、まだすべてではないにせよ、アルヒーフ（公文書館）が開放されるとともに、いくつかのアルヒーフ史料が公表、出版されるようになった。たとえば一九三七年二―三月の党中央委員会総会は、大テロル研究において最も注目されていた党会議の一つであったが、これについても、ようやく速記録が発表されるに至った。(3)

一九三七年二―三月総会が大テロルにおいて重要な意義をもつと想定されてきた理由は、ブハーリンらに対する「処置」が決定されたことなどに加え、より重要な問題として、この総会の席上、指導者たちの間で大量弾圧の是非をめぐって意見の対立があったと推測されてきたからである。この推測を生み出す最大の根拠の一つとなったのが、フルシチョフが秘密報告のなかで引用したポストゥィシェフの発言である。フルシチョフは、トロツキストとして逮捕された元キエフ州党委員会煽動＝宣伝部長カルポフなる活動家についてのポストゥィシェフ発言を次のように紹介した。

党と社会主義のために敵との不屈の闘いの長い道を歩んできたこの忠実な党員が、一九三四年になって敵の陣営に加わったなどとは信じられません。私はそんなことは信じない…。困難な歳月を党とともに歩んできて、一九三四年になってトロツキストに加わるなどということがどうしてありうるのか、私には想像もできない。これは奇怪なことです。(4)

この発言を額面どおりに受け取るならば、ポストゥィシェフは政治警察が引き出した「自白」の信憑性に疑問を抱き、

二―三月総会の場で、忠実な党活動家を「敵」として弾圧する大量弾圧の方針そのものを批判したと推定することができよう。もしそうであれば、大量弾圧の緩和を求める「穏健派」とスターリン派およびエジョフ率いるＨＫＶＤ機関（エヌ・カ・ヴェ・デ、内務人民委員部）とが総会で対立し、敗北した「穏健派」が今度はその後のテロルの中心的な標的となった、換言すれば、大量弾圧をめぐる意見の対立が、逆に二―三月総会後のテロルの拡大をもたらしたという推測も成立しよう。党指導部へのテロルの拡大という大テロルのメカニズムを、最高指導部内の「路線対立」に求める見解が生まれるゆえんである。[5] これはフルシチョフが秘密報告で描き出そうとした図式でもあった。

しかし、総会の速記録はフルシチョフの引用がきわめて恣意的であったことを物語る。この点はすでにゲッティらの研究が明らかにしたとおりである。[6] 引用された発言自体も重要な点で書き換えられているが、この点をひとまず措くとしても、引用の恣意性は、ポストゥィシェフ発言の途中と最後の重要部分を二箇所、省略したことに端的に示されている。省略によって発言の趣旨が一八〇度変わったのであり、引用されなかった箇所が、むしろ総会におけるポストゥィシェフ発言の趣旨であった。省略された箇所は次のとおりである。

まず、最初の省略についてであるが、「そんなことは信じない」（速記録によれば「これは信じがたい」である）という発言の直後に、モロトフの次のような不規則発言があった。「彼（カルポフ）が一九三四年になって初めて敵になったということが信じがたいのか？　彼は以前からもそうだったのだろう」。これを受けてポストゥィシェフは「もちろん、以前からだ」と答える。その後、フルシチョフが引用する文「困難な歳月を党とともに歩んできて…これは奇怪なことです」が続くが、その後に、ポストゥィシェフは次のように述べる。

彼のなかにはウジ虫のようなものがずっといた。いつ、このウジ虫が表に表れたのか、一九二六年か、一九二四年か、あるいは一九三〇年か、これを特定するのは難しいが、明らかにウジ虫のようなものがいて、それが、彼が敵

の陣営に落ちてしまうような何らかの働きをしたのである。[7]

フルシチョフが省略したポストゥィシェフ発言は、まさに「二心ある者」に対して公式に加えられた非難の論理そのものであった。それゆえ、フルシチョフによって紹介されたポストゥィシェフ発言を無批判的に受け入れて、大量弾圧をめぐる対抗という構図を二―三月総会に見いだすことはできない。二―三月総会を含め、大テロル期の歴史像は再構成を求められているといえよう。

大テロルに関する研究の一つに、一九八五年に出版されたゲッティの研究がある。[8] この研究は、一九三五年半ばから始まり翌三六年八月まで続いた党員証の点検と交換のカンパニア（事実上の党の粛清）の過程で、党中央によって「下からの官僚主義批判」が奨励されたことに着目し、その「下からの官僚主義批判」が「上から」の官僚制打破の意図（エジョフに加え、とりわけジダーノフの「急進主義」が重要な役割を果たしたとされる）と結合したことが、大テロルを生み出す重要な背景の一つとなったと主張した。彼はいわば大テロルにおける「人民主義的要素」を析出したのである。これは斬新な視角であり、注目に値する。しかし、同時に筆者には、党員証の点検・交換カンパニアの過程で奨励された「官僚主義批判」は、地区レヴェルの指導者までに限定されており、地方・州レヴェルの指導者は下からの批判の外に位置していたように思われる。地方指導者が批判の及ばない「聖域」に位置したとすれば、地方・州指導部の権威はむしろ高まるであろう。「下からの批判」が地方指導部に及ぶためには、党中央の指示がなければならず、党中央が地方指導部に対する批判を奨励するに至った要因は、別個に検討されなければならないと考える。

公開されたアルヒーフ史料に基づく実証的な大テロル研究として、西側では、ゲッティとマニングの編集による論文集が公刊されている。[9] ロシアにおいても、ヴォルコゴーノフが大テロルについていち早く論じたほか、[10] 若手の研究者フレヴニュークが一連の著作で注目すべき分析を行っている。[11]

ゲッティとマニングが編集した論文集の執筆者全員に共通する最も重要な問題関心は、「なにゆえ」（Why）の問題をひとまず措いて、「粛清がいかに実施され、いかなる経過を辿ったか」という「いかに」（How）の問題を検討すべきだという点にあろう。この関心の前提にあると同時に、研究から得られた結論でもある大テロル観（あるいはスターリン体制観）は、大きく次の四点にまとめられる。すなわち第一に、スターリンは大テロルを実行するうえで、農業集団化から外交に至る他の様々な重要問題と同様、明確な展望と計画をもっていなかったし、また、全体を統制するだけの能力ももたなかった。これは、いわゆる全体主義論の否定である。第二に、大テロルはいくつかのジグザグ（弾圧強化と緩和あるいは手控え）を辿っており、これは、明確なグランド・プランが存在しなかったことを示唆する。第三に、大テロルがジグザグを辿ったことの理由を、大量弾圧の是非をめぐって指導部内で対立があったことに求める見解は、史料的に裏付けられず、根拠がない。最後に第四として、「なにゆえ、テロル？」という論点については、明確な解答は出せず、少なくとも「単一の原因」で説明することは不可能である、という主張である。(12)

これらの主張は傾聴に値するが、しかしながら「なにゆえ」に代えて「いかに」を検討すべきであるということの過度の強調は、時として、スターリンの政治的意図に対する関心を弱めかねない危険を孕む。「敵の摘発」の指示や呼びかけは、スターリンら最高指導部が政治上、経済上の何らかのボトル・ネックを感じているがゆえになされるのであり、彼らの意図がどこにあったのかは個別に検討されなければならない。

また、大テロルの「グランド・プラン」が存在したか否か、あるいは大テロルのジグザグの性格などについては、大テロルの側面ごとに考える必要があろう。たとえば、旧反対派に対する裁判については、具体的な形態（三大裁判という形態や、被告に誰が含まれるかなど）はともかく、ジノヴィエフ派、トロツキー派およびブハーリン派を弾圧し一掃するという目標は、スターリンによってかなり早い段階で明確に立てられていたといってよい。ペレストロイカの最盛

期である一九八九年、弾圧犠牲者の復権に関する「ヤコヴレフ委員会」が明らかにしたところによれば、一九三五年五月、エジョフは『分派主義から公然たる反革命へ』と題する論文の草稿を仕上げ、それをスターリンに送ってコメントを求めた。そこでは、キーロフ暗殺がジノヴィエフ主義者の企みであること、そして、ジノヴィエフ主義者とトロツキー主義者との間には「最も緊密な連繋」があり、両者は互いの活動について情報を交換していたことなどが述べられていたという。これはその後の裁判における筋書きと同じであり、すでにこの時点で、旧反対派に対する弾圧の基本的な構図が生まれていたことを物語る。(13)

旧反対派に対する弾圧についてはこのように把えることができるとしても、これまでスターリンを支えてきた指導層に対するテロルについては、これとは別に考えなければならない。彼らの多くは党中央委員会を構成する地方の最高指導者であり、彼らに対する弾圧は、旧反対派に対するそれとは異なる政治的意味をもつ。ここではとりわけスターリンの政治的意図、目的が重大な問題領域となろう。

フレヴニュークはこの点を含め、大テロルの原因あるいはスターリン指導部の政治的狙いについて、以下の仮説を提示する。ゲッティらと同様、複合原因説に立つといってよい。ただし彼は、個々の仮説について詳細には論じておらず、概括的な仮説を提示するに留まっている。第一に、一九三〇年代後半、ソヴェト体制は、教育のある有能な若手活動家を登用することが求められていた。古参活動家は政治の術に長けてはいるが、教育や教養に欠ける。彼らが登用されたのは、ボスに巧みに媚びへつらうからであり、無能な古参活動家を一掃して、若手の活動家と置き換える必要があった。

しかしそのためには、第二に、地方指導部の一体性を打破することが不可欠であった。古参活動家はお互いに親密な関係を結び、「強固な結び付き」を確立した。ある地方から別の地方への異動に際し、指導者は部下を引き連れていく慣行が一般的にみられ、その結果、地方には「親分―子分」の関係が根をおろした。

第三の要因として、フレヴニュークは戦争の脅威を挙げる。国際的な緊張の高まりは、国内における潜在的な「敵」（危急の時に「第五列」に転化しかねない「敵」）を事前に撲滅しなければならないという強迫観念を生みだした。潜在的な不満分子に対する警戒心が指導部内に強まったのである。この点は、「一九三七年」は必要だったとするモロトフの回想とも合致する、とフレヴニュークは言う。農業集団化に際して「クラーク」清算された人々や、何らかの機会に「人民の敵」として断罪された人々の親類や友人などのほか、とくにフレヴニュークが「潜在的な敵」として注目するのは、何らかの理由で党を除名され、あるいは党をやめた元党員である。一九三七年二月中旬、党中央委員会指導的党機関部部長マレンコフがスターリンに送った報告によると、こうした元党員の数は一五〇万人以上に達し、元党員の数が現在の党員数を上回っている工場も少なくなかったという。（ちなみに、一九三七年一月の党員と候補の合計は約一九八万人である。）スターリンは二―三月総会でこれらの数字を引用し、「人民の敵」に対する警戒心の必要性を強調した。フレヴニュークは、苦難を強いられ不満を抱く元党員がかくも多数存在するとすれば、指導部が危急の時を想定して彼らに対する危機意識をもつのも当然であると主張する。「抑圧は新たな抑圧を必要とする」というテロルの論理を彼は指摘するわけである。

第四に、彼が指摘するのはグラーグ経済（収容所経済）の重要性である。モスクワ＝ヴォルガ運河の建設や極東での金採掘労働、マグニトゴルスク建設などにおける囚人労働の重要性はつとに指摘されているとおりであり、「テロルの政治的目的は経済上の計算によって補強され、国家指導者の眼から見て、抑圧はさらにまた別の根拠を得た」とフレヴニュークは論じるのである。(14)

フレヴニュークの仮説は、複合原因説の立場を含め、概ね妥当であろう。しかし第一の仮説について、とくに、若手活動家を登用する必要性から地方指導部に対するテロルを導きだそうとする傾向が見られる点については、疑問が残る。

それは、若手幹部の登用の必要という議論は一般論としては理解できるものの、なにゆえこの時点でそれが切実な課題として認識されたのか、スターリンらが期待した幹部活動家の能力とは何だったのか、という点が不明確だからである。

一九三七年二―三月総会の少し前から強調された特徴的な議論は、後に見るように、地方指導部がソヴェト機関に代位して経済活動に埋没し、政治的活動あるいは党＝教育活動をないがしろにしているという非難であった。この非難から推測する限り、党の活動家に求められていた能力は、実務的能力ではなく、むしろ政治的能力であろう。旧専門家に代わって若手活動家を登用するというのであれば、フレヴニュークの主張は妥当性をもつであろう。なぜなら、教育の向上により、自前の専門家の育成が可能となったからである。一九二〇年代末、急速な工業化の開始は、シャフティ事件など、旧専門家に対する迫害を伴ったが、その際、提起されたスローガンは「技術を修得せよ」であった。これに対し、一九三七年二―三月総会において提起されたスローガンは「ボリシェヴィズムを修得せよ」であり、そこでは「カードルの政治的教育」が強調されていた。(15)

したがって、教育水準の低いこれまでの活動家層を、教育水準の高い若手と交替させる差し迫った必要性は、それほど大きかったとはいえないように思われる。むしろ、若手幹部の登用は、指導者層に対する弾圧によって生まれた空白を埋めた結果であろう。フレヴニュークの仮説に即していえば、第一の要因を第二の原因とするのではなく、第二を独自の要因として考えた方がよいのではないか。つまり、地方指導部のこの間の活動それ自体に、中央指導部の眼からみて更迭と弾圧を必要とする問題が生まれていたと考えるべきであろう。本稿は地方指導部に対するテロルに焦点をあて、フレヴニュークが挙げた第二の問題について、中央―地方関係の再編という視点から大テロルについて検討することを課題とする。

地方指導者層に対するテロルを一九三四年一二月のキーロフ暗殺と関連づけ、地方指導者に対するテロルが、第一七

回党大会でスターリンの書記長からの解任を図った指導者（シェボルダーエフなど）に対するスターリンによる報復であったとする説は、フルシチョフをはじめとして、古くから唱えられている。[16] ヴォルコゴーノフもこの立場に立つ。この主張は、スターリンが手紙やメモワールなどで書き記している場合はともかく、史料上の裏付けが不可能な議論であり、ともすれば、ヴォルコゴーノフの著作に示されるように、誇張していえば、すべてをスターリンの「非凡なる悪の知性」で説明する傾向に陥りがちとなる。[17] したがって、本稿ではこの論点には触れず、一九三七年以降の地方指導部に対する弾圧について、史料から読み取れる範囲で検討したいと思う。

すでに冒頭で触れたように、大テロルは党の最高指導部を含むあらゆる職業と階層の人々を襲った「複合現象」であった。それゆえ、大テロルのメカニズムを解明するためには、たとえば軍指導部に対する弾圧や農民に対する弾圧など、個々の領域ないし社会集団に即してそれぞれ別個に検討しなければならない。そして、その領域ごとに「複合原因」を検出していく必要があるように思われる。[18] 本稿の議論は、あくまでも、地方指導部に対する弾圧という大テロルの一側面についての考察と仮説の提示に留まることを断っておきたい。

一・一九三七年初頭における地方指導部の更迭

二―三月総会に先立つ一九三七年一月、重要な地方党組織の指導者、キエフ州第一書記のポストゥィシェフとアゾフ＝黒海地方第一書記のシェボルダーエフ、さらにクルスク州第一書記のイワノフが突然解任された。ポストゥィシェフは一九三七年一月一三日付党中央委員会決定（政治局決定を意味する）によって、シェボルダーエフは一月二日付決定により、またイワノフもシェボルダーエフと同じ日の一月二日付決定によってそれぞれ解任された。これらの解任決定が地方の指導部と党組織にとって「突然」であったことは、たとえばクルスク州における次のような状況からも窺う

ことができる。すなわち、一九三七年一月三日の州党機関紙『クルスカヤ・プラウダ』は、クルスク市党アクチーヴ（活動家）集会を翌日の四日に召集する市党委員会決定を掲載していたが、開催当日の四日になってから中止の決定を発表したのであった。

決定が記した解任の理由はそれぞれ異なる。シェボルダーエフに関する決定は、「アゾフ＝黒海地方党委員会書記シェボルダーエフ同志の政治的誤りと地方党委員会の不十分な政治的指導について」と題され、彼が「敵に対して許しがたい政治的近視眼を示した」と非難した。アゾフ＝黒海地方には党中央から政治局員・書記のアンドレーエフが乗り込み、決定の実施に向けて指揮をとった。そして、一月六日から七日にかけて地方党委員会総会が開催され、シェボルダーエフの解任が正式に決定された。(19)

クルスク州第一書記イワノフは、「経済に対する不十分な指導」を非難された。同州には党中央委員会農業部長ヤコヴレフが派遣され、彼の指揮のもとに一月八日から一一日にかけて州委員会総会が開催された。ここでもアゾフ＝黒海地方においてと同様、総会召集の決定は報道されず、州機関紙は総会について、開催された翌日から報道を開始した。総会開始の直前、機関紙が休刊となったこともアゾフ＝黒海地方と同じである。クルスク州に対する非難は重要な論点を含んでおり、後に改めて検討する。

キエフ州第一書記ポストゥィシェフに関する決定について、筆者はまだ全文を見ていないが、ある程度の概要は一九三七年二―三月総会における討論から知ることができる。ポストゥィシェフの跡を襲ってキエフ州第一書記に就任したクドリャフツェフその他の発言によれば、決定は「キエフ州党委員会の不十分な党指導とウクライナ党中央委員会の活動上の欠陥について」と題され、キエフ州指導部の「警戒心」の欠如を批判した。決定はポストゥィシェフをキエフ州第一書記とウクライナ党中央委員会第二書記から解任するとともに、キエフ州指導部が彼の指導のもとで、経済、とり

わけ農業への指導に埋没し、党本来の指導、とりわけ活動家の選抜および登用と政治的教育に然るべく取り組まず、「人民の敵」の暗躍を見過ごしたと非難した。[20] すでに言及した元州党委員会煽動＝宣伝部長カルポフ問題が、ポストゥィシェフ非難の重要な根拠の一つであった。

キエフには決定を携えて党政治局員・書記カガノヴィチが乗り込み、州アクチーヴ会議を組織した。ウクライナ中央委員会第一書記コシオールによると、党中央の決定はキエフの活動家の間に「呆然自失」をもたらしたという。[21]

ポストゥィシェフ解任に関する党中央の決定は一月一三日付であるが、決定の基本的内容は、すでにそれ以前に確定していた可能性がある。というのは、一月四日付『プラウダ』社説は、今なお多くの党組織で「人民の敵」が暗躍していると述べ、その例として、ロストフ（アゾフ＝黒海地方）とキエフの党組織を名指しで非難しているからである。ロストフ市に関わる部分には、「敵対分子」の言動をそのまま信用したという地方党委員会に対する批判もあり、これは一月二日付決定が社説の前提となっていたことを意味する。キエフ市党組織に対しても、「人民の敵」が党装置の指導職に潜り込み、自分たちの活動家を配置したという非難が加えられていた。これは間接的ながらポストゥィシェフと州指導部に対する責任追及を示唆しており、州指導部批判の方向は、一月一三日付決定以前に定まっていたと考えることもできる。

この頃、党中央による地方指導者の解任は、州・地方の一段下のレヴェルでもみられた。たとえば、サラトフ州の沿ヴォルガ・ドイツ人自治共和国では、一月一九日付決定によって指導部が更迭された。理由は農業問題であった。

ところで、一九三六年の農業はかつてない旱魃の影響を受けて深刻な不作となり、一部の地域では飢饉が発生した。オレンブルグ地方に関するアルヒーフ史料のなかには、「食糧援助が適時に放出されなかった結果、人々が餓死するという事態がみられた」という報告もある。[22] ただし、この年の飢饉は一九三二年後半からのそれと比べると、穀物生産高

は低かったにもかかわらず、まだ深刻ではなかった。しかし、農業の不作は畜産用の飼料準備を極度に悪化させ、一九三六年から三七年にかけての冬、家畜頭数は急激な減少をみることとなった。不作に直面した中央は、多くの地域に対して食糧・種子・飼料の貸付を行った。[23] サラトフ州とドイツ人自治共和国も貸付を受けた地域であった。

二―三月総会におけるサラトフ州党委員会第一書記クリニツキーの発言によると、ドイツ人自治共和国では、貸し付けられた食糧と種子の配分をめぐって混乱が生じた。旧指導部と地区がコルホーズの党活動家や管理部メンバーを優遇する割当基準を設定したことにコルホーズ員が反発して、「激しい抗議行動（резкие выступления）」を起こしたというのである。この事件の詳細はいまだ明らかにしえていないが、一連のコルホーズで貸付のボイコットや搬送労働の拒否を含む抗議行動が生じたことは間違いない。本稿の議論にとって重要なことは、こうした混乱の原因が、ドイツ人自治共和国指導部による指導者選抜の方法に求められたことである。すなわち、指導部が自分たちの仲間内で幹部の登用を行っているというのであった。[24]

クルスク州における指導者更迭も、ドイツ人自治共和国における事態と同様、その理由の一端は一九三六年の農業危機に由来した。アゾフ＝黒海地方指導部の更迭も農業生産の失敗と関連した。キエフ州においても、じゃがいもやビートのほか、穀物の取り入れが失敗し、大量の作物が台無しになったとして、州の農業指導部は「人民の敵の巣窟」であるとの烙印を押された。[25] 農業生産の失敗は、全国で多くの農業指導者の追放をもたらしており、一九三七年初頭の指導者に対する弾圧の重要な要因の一つであった。

しかし、党中央が投げかけたクルスク州指導部に対する非難は、農業生産の失敗だけではなかった。州党委員会総会の冒頭でヤコヴレフが読み上げた一月二日付の政治局決定は、「クルスク州党委員会第一書記について」と題され、「(1) クルスク州経済に対する不十分な指導のゆえに、イワノフ同志をクルスク州党委員会第一書記から解任し、党中央委員

会の管轄下に召還する。(2)州委員会第一書記としてシェボルダーエフ同志を推薦する。(3)州委員会とクルスク州党アクチーヴ会議に本決定を説明するため、ヤコヴレフ同志がクルスクに赴くよう提案する」と定めた。[26] これから判断する限り、イワノフとシェボルダーエフの解任は同じ日の政治局会議で、いわばセットになって決定されたと考えてよい。

第一書記解任の具体的な理由については、モスクワから現地に派遣された指導者が与えた説明から知りうるに留まる。政治局において解任理由がどの程度論議されたかは不明である。アルヒーフに残された州党委員会総会におけるヤコヴレフ演説の草稿から判断すれば、完成した彼の演説原稿は、一九三六年末の段階でできていたもの（恐らくスターリンと政治局への報告用）をもとにして、彼がクルスクに来てから作成したと考えられる。

なぜなら、演説草稿には一九三六年と三五年の出来事をそれぞれ「今年」および「昨年」と表現した箇所がある一方で、総会開催の二日前、ヤコヴレフはいくつかのコルホーズを訪問し、州委員会批判の材料を集めて草稿を作成しているからである。しかも、その草稿は、実際になされた演説と比べるとはるかに簡略であり、いわばレジュメに相当する分量であった。[27] また、議論の展開の仕方もかなり違っており、たとえば、彼が演説で第一の問題点として批判した現地活動家の流動性の高さ、州委員会と地区委員会が行った地区執行委員会議長やＭＴＣ（エム・テ・エス、機械＝トラクター・ステーション）所長などの頻繁な更迭は、草稿では触れられていない。州委員会批判の基本は事前にできあがっていたが、内容のかなりの部分はヤコヴレフに委ねられていたと考えてよいであろう。

草稿に基づいて整理すれば、イワノフと州委員会はまず、一九三六年の農業生産の失敗に関して叱責された。ヤコヴレフによれば、旱魃という同じ条件のもとでも高い単位収量を挙げている地区があり、旱魃は不作の真の原因とは言えない。問題は、コルホーズ員の労働意欲を無視する政策、たとえば、支払いにおける平等主義、些細な罪に対する法外な罰金などが実行されたことにある。そしてヤコヴレフは、これらの「行きすぎ」は州の農業管理局や財務管理局に潜

り込んだ「人民の敵」の破壊活動の産物であり、州党委員会は適時に然るべく対処しなかったと非難した。

農業指導の失敗以上に重大な意味をもつのは、イワノフら州指導部が党中央と下級機関に対して必要な情報を隠蔽したという非難であった。ヤコヴレフの演説草稿の標題は「真実についての問題」と題されており、恐らく、政治局でイワノフの主たる解任理由として挙げられたのは、この問題であったように思われる。ちなみに、総会の開催中、アンドレーエフがアゾフ＝黒海地方からモスクワへ戻る途中、シェボルダーエフを連れてクルスクに立ち寄り、総会で簡単な演説を行ったが、そこで彼が強調したのも、イワノフら州指導部が、スターリンが州党委員会に対して加えた批判と指示を下級機関に伝えず、また、州の実情をスターリンと党中央に対して隠蔽したという点であった。(28)

すでに指摘したように、草稿では一九三六年と三五年の出来事がそれぞれ「今年」および「昨年」の出来事と記されていた。注目すべきことに、これらの表現はまさに、イワノフが下級機関と中央に対して事実を隠蔽したという部分に関わる。州指導部が中央から受けた批判を下級機関に対して隠蔽した事例としてヤコヴレフが挙げたのは、第一に、中央から州に派遣された農業活動家に対して州指導部が十分な活動条件を整えていないというスターリン名の批判電報を、地区委員会に送付しなかったこと、第二に、一九三五年一二月に開かれた非黒土地帯の農業問題に関する会議で、スターリンがイワノフに与えた「警告」（農民に対して苛酷な穀物供出課題を課しているという批判）を、党委員会総会ないしビューローで報告さえしていないというものであった。

さらにヤコヴレフは、中央に対する「隠蔽」の「事実」として、ここでも農業問題から三点挙げる。（ヤコヴレフが農業担当であったために、非難の材料として農業問題が重視されたとも考えられるが、政治局の意向を彼が無視することはありえないとすれば、政治局の見解が示されていると推定してよいであろう。）事例の第一は、一九三六年の農業生産の実情を隠蔽したことであった。中央はクルスク州についての正確な情報を、他の機関を通じて入手したという

（具体的な経路については明らかにされていないが、他の機関とはＨＫＶＤであろう）。第二は、コルホーズ員が作業日に応じて受けた現物支払い量を実際よりも高く報告した。第三に、州委員会が自ら「労働義務制」（害虫駆除や穀物の搬送など、特定課題の実施に向けて動員体制を敷く、拒否する者には抑圧措置が加えられる）の実施を求めたにもかかわらず、中央がその取消を求めるや、州委員会は責任を地区指導部に押し付け、自らの関与を隠蔽した、というものであった。[29] これは、二―三月総会におけるヤコヴレフの表現によれば、「体面を保つためのあからさまな詐欺（прямой обман）にまで達した」事態であった。[30]

党中央に対する事実の隠蔽という地方指導部の行動様式は、もしそれが事実であるとすれば、党中央にとって深刻な問題を提起しよう。地方指導部が各種カンパニアの過程で直面する困難の大きさを考えれば、隠蔽という行動様式は単にクルスク州に留まらず、すべての地方に当てはまるからである。とりわけ、ＭＴＣに対するコルホーズの現物支払いを含む穀物調達において、中央の過大な要求を受けた地方指導部が、農民に対して「行きすぎ」と非難される抑圧措置を適用し、また保身のために不都合な情報を隠蔽するという「欺瞞行為」を働くのも、いわば必然であった。したがって、クルスク州指導部のような対応は、上から課される課題が厳しくなればなるほど、全国の地方指導部でより広範に生まれる可能性があり、党中央からすれば一層看過できないものとなろう。

しかし、地方指導部のこのような行動様式は、何もこの時期に限られたものではない。一方では過大な要求を上から課され、また他方では下からの抵抗に直面する中間管理職に固有の行動様式であるといってよい。したがって、問題はなにゆえこの時期に、このような「隠蔽」が断罪されたかについて検討しなければならない。この点については最後に再び立ち戻るが、ここでは、一九三七年二―三月総会における議論を素材として、当時、党中央が中央―地方関係についていかなる認識を抱いていたのか、もう少し詳しく見ておくことにしたい。

二・一九三七年二―三月総会

一九三七年二月二三日から三月五日にかけて開催された党中央委員会総会の重要な議題の一つは、新憲法の制定に関連して実施される最高ソヴェト選挙に向けた党の取り組みについてであった。ジダーノフ報告に基づく決議「新たな選挙制度によるソ連最高ソヴェト選挙に向けた党組織の準備と、それに応じた党的＝政治的活動の再編について」は、いくつかの党組織で長期間にわたって党機関（各級党委員会）の選挙が行われず、規約が侵犯されていると指摘して、秘密投票による党機関選挙を実施するよう定めた。[31] これ以後、よく知られているように、総会が指示した党内民主主義の強調のもとで、党員に対する未曽有の弾圧が行われることになる。これは、先進的で民主的な憲法と喧伝されたスターリン憲法のもとで、大テロルが加えられたこととパラレルの関係にある。

ところで、選挙によらない党委員会への活動家の任命は、自己補充（кооптация）と呼ばれ、すでに一九三六年の半ばから非難の対象となっていた。一九三六年七月二七日付『プラウダ』の社説は、「党指導における集団性」と題して、サラトフ地方の一連の市委員会で「自己補充システム」が広く適用されていると批判した。一九三五年五月に指示された党員証点検と翌年の党員証交換によって、多くの党機関に欠員が生じ、その欠員が自己補充によって埋められていたのである。この社説を契機に、地区および市レヴェルにおける自己補充批判が、しばらくの間『プラウダ』紙上で展開された。[32]

しかし、一九三六年の自己補充批判はあくまでも地区・市レヴェルに限定されており、この点は、地方・州指導部をも巻き込んだ一九三七年二―三月総会前後のそれとは異なっていた。しかも、地方指導部をも対象とした一九三七年初頭の自己補充批判は、一般的な党内民主主義の観点からなされただけでなく、自己補充の結果生じた指導部の特殊な構

成に対しても向けられていた。むしろ党中央にとって重要視されたのは、後者の党委員会人事のあり様であったと考えてよい。

アゾフ＝黒海地方でシェボルダーエフ解任を指揮したアンドレーエフは、スターリンに宛てて、「地方党委員会ビューローは現地ロストフ（地方の首都）のアクチーヴを信用せず、地方委員会指導者、とりわけシェボルダーエフ同志が以前の活動地で交友関係を結んだサラトフその他の活動家を、度を越して信用しており、これに対して、地方委員会総会とロストフ市党アクチーヴ会議で鋭い批判が加えられた」との報告を送った。[33]

さらに彼は、現地活動家の不満の強さを物語る資料として、ロストフ党アクチーヴ会議における発言の速記録を同封した。それによれば、ロストフ市で活動家が登用されないのは、ひとえに、シェボルダーエフたちが自分たちの知り合いを連れてきたからだというのであった。[34] 指導的地位に登用されない現地活動家の不満は、各級の党指導部が特定の交友関係で結ばれた「他所者」によって占められていることに向けられたのであった。

この人事の「歪み」は二―三月総会において厳しい非難を浴びた。たとえばマレンコフは、一九三三年にタタールから東シベリア第一書記に赴任したラーズモフを例に挙げ、ラーズモフの後に続いて、東シベリア州党委員会の工業＝運輸部長、農業部長、イルクーツク市党委員会書記など多くの要職に「徐々にタタールから多くの活動家が異動してきた」と批判した。そしてマレンコフはさらに、このような人事の結果、東シベリアには一種の「アルテリ」（協同組合）ができあがったが、これはアゾフ＝黒海地方とキエフ州の事例と同様、党指導部と活動家との結び付きを弱める以外の何物でもないと断罪したのである。[35] マレンコフの発言には意図的な誇張があり、会場から反論される場面もあったが、こうした人事の「歪み」は総会の多くの発言者に共通したテーマの一つであった。

地方指導者が異動に際して、友人や同僚、部下を引き連れていく現象は「尻尾」あるいは「お供」（**XBOCT**）と呼ば

れ、この言葉は二―三月総会以後、指導者を告発する際、きわめて頻繁に用いられるようになる。そして大テロルの展開にとって重要なことは、「尻尾」批判が「警戒心の欠如」と結び付けられ、「尻尾」のなかにこそ「敵対分子」が潜んでいるとの「論理」を生み出していったことである。シェボルダーエフの跡を襲ってアゾフ＝黒海地方第一書記に就任したエヴドキーモフが、二―三月総会で前任者シェボルダーエフを非難した論点の一つも、この「尻尾」と「敵」との関係であった。彼によれば、シェボルダーエフが引き抜いてきた「サラトフの友人」からなる「かなり大きなグループ」と「ザカフカース・グループ」の二つの潮流が、地方指導部の回りに「反革命的な壁」を築き上げたのであった。(36)

ポストゥィシェフに対する同様の非難はクドリャフツェフによって発せられた。クドリャフツェフによれば、キエフ党組織にはポストゥィシェフと個人的に親しい「極東閥」が存在し、指導職に登用されて彼の厚い信任を受けていたほか、ウクライナの首都移転にともなって、彼がハリコフからキエフに異動した際、引き連れてきたグループも存在した。しかも、後者のグループは、共和国と州の活動家だけでなく、市や地区あるいは企業の活動家をも含む大集団であった。ポストゥィシェフが引きずってきた「尻尾」は、またそれぞれの「尻尾」をもっていた。たとえば、ハリコフ市ソヴェトからキエフ市ソヴェトに異動してきたのは、市ソヴェトの指導部メンバーだけでなく、運転手やタイピストなど「友人や配下の者」をも含んだというのである。(37)

ウクライナ人民委員会議議長リュプチェンコは、ポストゥィシェフのこうした人事の結果、州党委員会の四人の部長（指導的党機関部、マルクス＝レーニン主義宣伝部、運輸部、ソヴェト商業部）と二名の州執行委員会議長代理など、州指導部の著しい部分がトロツキストによって占められたと非難した。(38)

パトロン＝クライエント関係が地方指導部に成立したという批判と関連して注目に値することは、二―三月総会の少し前から、指導部の「自画自賛」（хвастовство）や「高慢」、指導者に対する「追従」「ごますり」（подхалимство）、

指導者崇拝（ВОЖДИЗМ）などが声高に非難されるようになったことである。自画自賛と指導者崇拝について、たとえばクドリャフツェフは、ポストゥィシェフ・グッズさえ出回るようになったと皮肉った。アゾフ＝黒海地方を取り上げてこの問題を論じたアンドレーエフによれば、「敵」が指導部に潜り込む重要な手段の一つが、指導部の「自画自賛」体質につけいる「追従」であった。地方指導者個人に対する「忠誠」が、地方における活動家登用の「基準」になっているというのである。『プラウダ』編集長メフリスも、ウラル州、北部州、アゾフ＝黒海地方およびキエフ州を名指しして、自画自賛体制と指導者崇拝を非難した。(39)

地方指導部における親分＝子分関係とそれに基づく「自画自賛体制」の成立は、党中央の眼からすれば、地方が一つの独自な王国を形成し、それゆえ地方からの情報入手が困難になりかねないことを意味する。先に紹介したマレンコフの「アルテリ」発言も、こうした党中央の認識を示すといえよう。

この問題を敷衍したマレンコフの議論はとくに注目に値する。彼の議論の前提となる事情は次のようなものであった。すなわち、一九三六年一二月末、玉突き状態で三名の地方指導者の異動が行われた。スターリングラード州党委員会第一書記ワレイキスが極東地方第一書記へ異動となり、代わってスターリングラード州第一書記にはクリミア第一書記のセミョーノフが、そしてクリミアの第一書記には、それまで極東地方第一書記であったラヴレンチエフが就任した。(40) 異動後、次のような報告が寄せられたとマレンコフは言う。極東に移ったワレイキスは「党活動の分野でこのような混乱を極東地方で目にするとは思わなかった」と述べた。スターリングラードに異動したセミョーノフも、「このような混乱をスターリングラードで見るとは思わなかった」と述べた。ラヴレンチエフも同じ趣旨の報告を行った、というのである。会場は笑いに包まれたが、この「笑い話」からマレンコフが引き出した結論は、きわめて重大な政治的意味をもつ。少し長くなるが引用する。

党中央が知らなかったような欠陥は、ラヴレンチエフ同志にはよく分かっていたことだと思う。私はこのことを、ワレイキス同志、セミョーノフ同志およびラヴレンチエフ同志から受けた同じ時期の情報に基づいて話しているのである。地方と州の党委員会指導部が、指導上の欠陥に関するすべての問題を党中央に提起しているとはいえない事実が数多く存在する。そのような現象は個々にというより、その逆に、おびただしく見られるのだ。(41)

スターリンも結語において、カザフスタン第一書記ミルゾヤーンとヤロスラヴリ第一書記ワイノフを例に挙げ、「尻尾」の慣行を厳しく非難した。彼によれば、スターリンはミルゾヤーンに、以前の活動地のアゼルバイジャンやウラルから友人を引き連れていくのを止めるよう、何度も注意したという。ここでのスターリンの表現は、マレンコフのそれと同様、党中央の認識を窺い知るうえで重要である。彼は、アゼルバイジャンやウラルから、カザフスタンとは何のつながりもない自分の友人たちを連れてくることは何を意味するか、と自ら問題を立てて、それに次のような解答を与えた。すなわち、「君は、現地組織からある程度の独立（некоторая независимость）を、そして、もしこう言いたければ、党中央からある程度の独立をもつに至った、ということを意味する。向こうには向こうのグループが、こちらにはこちらのグループがいて、それは私個人に献身的な人々だ」というわけである。(42)

以上の議論から、一九三七年初頭における地方指導者の更迭の背景には、地方指導部が親分＝子分関係に基づく一体性を示し、その結果、中央と地方の情報チャネルが十分機能しなくなった、という党中央の認識があったと結論づけてよいように思われる。一九三七年一月六日付『プラウダ』が報じたキルギスからの通信員の報告も、テーマは指導部の「一体性」であった。報告によれば、キルギス州党委員会総会は党中央の批判を受け、州指導部の誤りを是正した。州党委員会指導的党機関部部長を党中央の決定に基づき解任したほか、農業の責任者（党委員会農業部長と農業人民委員）を総会メンバーから追放するなど、指導者の多くを更迭したという。キルギス第一書記ベロッキーも、「敵」に対

して「政治的盲目性」と「お人好し」を示したと非難された。指導部の誤りの根源は「縁故主義（семейственность）」にあると断罪されたのである。

地方指導部の一体性と、その基礎にある親分＝子分関係および「尻尾」の任命を可能にしたのが、当時の党中央の「論理」によれば、「自己補充」の慣行であった。二月に入ると、『プラウダ』紙上では総会に向けて「自己補充」非難のキャンペーンが張られるようになる。たとえば二月一三日付『プラウダ』社説は、キエフとスヴェルドロフスクの党組織を例に挙げ、自画自賛体制と自己補充を非難した。自己補充システムは指導部に無批判的な「従順な人間」（молчальник）あるいは「追従する人間」を登用するための制度であると位置づけられた。すでに触れたサラトフ州沿ヴォルガ・ドイツ人自治共和国における「混乱」も、原因は指導部の自己補充に求められていた。

以上のように、少なくとも史料から窺える限り、党中央の眼からみて、一九三七年初頭における最大の問題の一つは、党中央に対する「欺瞞行為」と「閉鎖性」を可能にする地方指導部の「一体性」にあった。地方指導部に対する更迭と弾圧は、この「一体性」を打破し、中央の統制をさらに強化することを目的としたということができよう。ただし、地方指導部の「一体性」をその強固な「自立性」と把えることは正しくないであろう。なぜなら、一九三〇年代後半、地方指導部には上から提起された政策を実施するうえで、その方法をめぐるごく限られた範囲内での裁量しか残されていなかったと考えられるからである。

では、中央の統制を一層強化する方向での中央―地方関係の再編が、なにゆえ一九三七年初頭の時期に必要とされたのか、あるいはスターリンと党中央が必要と考えるに至ったのか。本稿はいまだ明確な結論を提示しうる段階にはないが、以下の仮説に基づいて、この問題について検討したいと考える。すなわち、スターリン体制をこれまで支えてきた古参ボリシェヴィキの一部に、大量弾圧への「抵抗」とまではいかないにせよ、「ためらい」ないし「消極姿勢」があ

ったという仮説である。フルシチョフが描く「大量弾圧方針をめぐる路線対立」という図式は成立しえないにせよ、弾圧の個々の局面については地方指導者の「消極姿勢」があったと考えることができるのではないか。地方指導部がある程度の交友関係で結ばれた一体性をもった集団であればあるほど、そのなかの特定の人間を「人民の敵」として摘発することに対しては消極的にならざるをえないであろう。そこで、次に大量弾圧に対する地方指導者の対応について具体的に検討することにしたい。

三・大量弾圧と地方指導者

地方・州レヴェルの指導者が「人民の敵」をかばっているという非難は、第二次ジノヴィエフ＝カーメネフ裁判が開始される前にも見られる。一九三六年八月、『プラウダ』はドニェプロペトロフスク州における「破壊活動」に関連して、第一書記ハタエーヴィチが「敵」に対して宥和的な態度をとっていると非難した。ドニェプロペトロフスク州からの通信員報告によると、州党委員会農業部長であったクラスヌィーなるトロツキストについての問題が州党委員会に対して三度提起されたが、「その度に州党委員会書記ハタエーヴィチ同志は、この卑劣な二心者を追放させなかった」。また、クリヴォイ・ログ市党委員会書記のレヴィティン某は、『プラウダ』の暴露により書記を罷免されたが、ハタエーヴィチは彼を別の要職に就けたという。さらに通信員は、こうした敵対分子の摘発は州党委員会を経ないで（すなわち、НКВДの手によって）なされたが、党指導部はこれについて党組織に報告しなかった、とハタエーヴィチら指導部を批判した。(43)

地方指導者に対する『プラウダ』紙上でのこのような公然たる名指しの非難は、この時点では例外的であった。しかしこの非難は、個々の「人民の敵」摘発に際して、地方の最高指導者のなかに消極的姿勢が見られたことを示唆する。

『プラウダ』紙上でのハタエーヴィチ批判は、「人民の敵」摘発に消極的姿勢をみせる地方指導者に対する警告であったと考えることができよう。

一九三七年二―三月総会において、ＨＫＶＤ人民委員代理アグラーノフは、かつての上司であるヤーゴダに容赦ない非難を加えたが、それによれば、ヤーゴダは一九三六年前半、後に第二次ジノヴィエフ＝カーメネフ裁判で裁かれることになる被告ドレイツェルとピケリの自白調書を、「嘘」、「ありえないこと」などとして受け付けなかったという。(44) このことは、一九三六年前半にあっては、古参党員に対する個々の告発の妥当性に対して、まだ「批判的な」眼で見ることが可能な雰囲気が上層部に存在したことを物語る。

フレヴニュークはアルヒーフ史料に基づき、オルジョニキーゼが自己の管轄下にある重工業関係の活動家を弾圧から守ろうとして、時としてスターリンとＨＫＶＤ機関に圧力を行使したことを明らかにしたが、オルジョニキーゼのそうした行動様式は地方指導者についてもあてはまるであろう。(45) 地方指導者が直接の部下ないし同僚に対する「人民の敵」という告発に対して消極的姿勢を示し、それに関連する「事実」を党中央と下級組織に対して「隠蔽」したということは十分想定できよう。

このことを前提として、再度、なにゆえ一九三七年初頭か、という問題に戻るならば、そこには、党員証交換が一九三六年八月に基本的に終了した後においてもなお、多くの「トロツキスト」がＨＫＶＤ機関により「暴露」されたという事情があったと考えられる。たとえば一九三六年一一月一四日、党中央はアゾフ＝黒海地方ロストフ市党組織についての決定を発し、党員証の点検・交換が十分な警戒心をもって行われなかった結果、多くの「敵」が新党員証を手にするに至ったと非難した。この決定の後、ロストフ市など一連の都市で大々的な粛清が実施され、党員証点検・交換カンパニアの全期間を通じて摘発された人数に匹敵する数のトロツキストが新たに暴露された。(46) シャフティ市では、ＨＫＶ

Дによる摘発、逮捕に対して市党委員会が反対し、「逮捕は誤りである」との決定を下すという事例もみられた。[47]

党員証点検・交換カンパニアの不十分性に対する党中央の事後的な批判と、その批判を受けた後の粛清の激化は、アゾフ＝黒海地方に留まらない。クルスク州も党中央から一九三六年一一月二三日付決定で批判され、新たな粛清が実施された。州の旧指導部を非難する目的でなされた説明ではあるが、それによれば、党中央の決定は、党員証点検・交換によって党の隊列が強化されたとする州党委員会総会の確認とはまったく逆の結論を与えたという。[48]

サラトフ州においても同様であった。一九三七年七月の報告によると、党員証点検・交換カンパニアの過程で摘発された「トロツキスト・ジノヴィエフ主義者と右派」の数が二〇三人であったのに対し、交換終了から一九三六年一二月末までの間に摘発された「トロツキスト・ジノヴィエフ主義者と右派」は一四二人に達したという。[49]

一九三六年末における粛清の激化、すなわち、НКВДの活動の強化は、パトロン＝クライエント関係で結ばれている地方指導部にとって大きな脅威であった。そうであれば、個々の告発に対する地方指導部の消極性はますます顕著となろう。そして、その消極性は「人民の敵」の「庇護者」という告発を生み出し、テロルはさらに地方指導部の頂点へと拡大していくことになる。たとえば、一九三七年一月、ヤコヴレフの指揮のもと開催されたクルスク州党委員会総会は、ビューローと総会メンバーの四名を、「階級的警戒心の麻痺」あるいは「トロツキストに対する寛容な態度」を理由として、それぞれビューローと総会のメンバーから追放する決定を下した。[50] アゾフ＝黒海地方においても、シェボルダーエフ更迭後、新指導者エヴドキーモフのもとで旧指導部の多くが追放された。一年半後の議論ではあるが、シェボルダーエフ更迭後、アゾフ＝黒海地方からはシェボルダーエフ人脈が一掃されたといわれた。[51] 新指導部は自己保身を図るためにも、テロルの実施を通じて、自らの「警戒心」を証明しなければならなかった。

たとえばアゾフ＝黒海地方では、一九三七年六月から一〇月までの間に、除名あるいは逮捕された地区党委員会書記

は第二書記を含め二三名、罷免された者は一二名で、全体の四分の一にあたる三〇地区の指導部が打撃を受けた。[52] 弾圧は一般党員にも及んだ。同地方から党中央委員会に宛てられたある党員の訴えによれば、同地方では一九三七年前半、除名され監獄に送られた党員は三〇〇〇人を越えた。手紙はさらに、その一割は「明らかな敵」だが、残りの九割は無実であり、非党員に対しても「行きすぎ」が行われて、「数万の人々が職を追われている」と非難した。そして手紙は、党中央が権威ある委員会を派遣すれば、エヴドキーモフ率いる新指導部が「いかに重大で深刻な政治的誤りを犯したか、得心するだろう」と訴えた。[53]

二―三月総会における地方指導者に対する名指しの批判は、地方指導者に対する「下からの批判」を解放する意味をもった。これ以後、「下からの批判」は活発化し、それにともない、地方の最高指導者が「下から」告発されるようになる。たとえば、一九三七年一〇月に開かれたロストフ州（旧アゾフ＝黒海地方。行政区画の変更については後述）党委員会総会では、第一書記エヴドキーモフが指導部内の「敵」を見逃したことを告発し、彼の基調報告を「非弁証法的」で「正しくない」と公然と批判する発言もなされるに至った。[54]

オレンブルグ州では、一九三七年六月までに、州党委員会ビューローを構成する一一名のうち、第一書記ゴルキンを除く一〇人全員が「人民の敵」として摘発された。ゴルキンは六月総会で第一書記の地位から解任され、ソ連中央執行委員会書記に異動したが、彼に対してはその後も党員証の剝奪を求める告発が直接、党中央に宛てて何度もなされるまでになった。[55] これらの事例は、地方の最高指導者に対する「下からの批判」がいかに高まったかを示している。

НКВД機関と「下からの」告発に対して同僚を擁護しようとした地方指導部の「一体性」が、逆に彼ら自身に対する弾圧の契機となったことを示す事例が、サラトフ州における指導部の更迭劇に見られる。サラトフ州では一九三七年六月、州党協議会が開かれたが、それから一カ月も経たないうちに、党中央は「サラトフ州党委員会指導部について」

と題する決定を採択し、州第一書記クリニツキーと党統制委員会代表（サラトフ州担当）ヤコヴレフの解任を定めた。党中央委員会書記アンドレーエフが決定実施に向けて党委員会総会を指揮した。総会の席上、クリニツキーとヤコヴレフはともに「人民の敵に対する絶望的なまでの盲目性を示した」と断罪された。彼らが庇護した敵として名前を挙げられたかつての指導者は、州執行委員会議長バルィシェフ、州党委員会第二書記リペンディン、州党委員会指導的党機関部部長フィレーエフ、サラトフ市ソヴェト議長グリンシテイン、州党機関紙編集長カスペルスキー、州コムソモール委員会書記ナザロフら、多数に上った。

これらの指導者のうち、アルヒーフには第二書記リペンディンについて党中央とクリニツキーとの間で、三月から五月にかけて交わされた交信が残されている。この交信は、地方指導部の「一体性」と同僚への弾圧に対する「消極性」を示しており興味深い。それらによると、一九三六年一〇月、リペンディンが共産主義大学の学生だったときの同級生ポジダエフなる人物がトロツキストとして逮捕され、彼との交友関係を「自白」した。この件は直ちにマレンコフに報告され、一九三七年三月、クリニツキーはマレンコフから、リペンディンについて「調査と然るべき措置を講ずるよう」指示された。これに対してクリニツキーは、交友関係はないとしたリペンディンの説明をマレンコフに送り、「リペンディン同志の説明で問題は解決していると考える」と報告した。ところがその後、リペンディンは再度、中央から疑惑の眼を向けられた。それは、彼が一九三四年に出版したパンフレット『コルホーズにおける労働組織』の共著者ルーバンが「人民の敵」として「暴露」されたからであった。州党委員会ビューローは、そのパンフレットを回収、絶版とする一方で、リペンディンを擁護する決定を下し、五月、アンドレーエフにその決定を送付した。

しかしリペンディンは結局、難を免れることはできなかった。州委員会ビューローがリペンディンをいつ「人民の敵」として断罪したかは明らかでないが、彼は六月の州党協議会において第二書記を解任され、七月初めまでには「人

民の敵」として断罪されるに至った。彼の失脚に党中央の直接の指示があったことは容易に推測できよう。リペンディン問題は、七月の党委員会総会においてもとりあげられ、クリニツキーと党統制委員会代表ヤコヴレフを非難する重要な論拠の一つとなった。ヤコヴレフはリペンディンとともに、「有害な輪作」など「農業における破壊活動計画を練り上げ」、またクリニツキーとともにリペンディンの復権を企図したと非難された。

クリニツキーは、すでに述べたドイツ人自治共和国における「混乱」に関連して二―三月総会でも厳しい非難を受けていたが、今や「人民の敵」を擁護した責で罷免されるに至った。リペンディン問題がクリニツキー失脚の最大の原因であったか否かについてはなお不明であるが、クリニツキーが彼の同僚を擁護する態度を示したことは明らかである。党統制委員会代表ヤコヴレフに関しても、クリニツキーは彼を擁護する姿勢をとった。六月の党協議会開催に際して表面化した「下からの」ヤコヴレフ非難の動きに対して、七月、クリニツキーは彼を擁護する報告をエジョフに送っていたのである。[56] こうしたクリニツキーの態度が、地方指導部の「一体性」に対する党中央の疑惑を強め、彼らの更迭へと結果したと考えてもあながち不当ではないであろう。

以上述べてきたように、少なくとも史料から読み取りうる限り、一九三七年初頭に始まる地方指導部批判には、地方指導者に対するテロルを発動したスターリンおよび党中央の意図が示されていたと考えてよい。テロルは地方の「一体性」を打破し、中央の統制を強める方向で中央―地方関係の再編を図る意義をもった。しかもその際、無差別の弾圧に対する地方指導部の消極的姿勢が、彼ら自身に対する弾圧を生み出す重要な要因となった。もちろん、地方指導者の運命については、その後の推移を検討しなければならないことはいうまでもない。一九三七年初頭に更迭されたポストゥィシェフにせよ、またシェボルダーエフにせよ、彼らが最終的に失脚したのはそれぞれ一九三八年一月と一九三七年六月であり、それに至る経緯は別個に検討しなければならない。[57] しかし、三七年初頭は彼ら二人を含む地方指導者の政治

的運命にとって重大な転換点となった。地方指導部批判はテロルに対する「抑制」を解き、中央―地方関係の暴力的再編へと帰結したということができよう。

四・行政区画の再編

一般に、中央―地方関係にとって行政区画は重要な問題領域を構成する。この点で注目に値するのは、大テロルがますます激しさを増していた一九三七年九月、多くの地方について行政区画を変更する決定が相次いで発せられたことである。

まず九月一一日付ソ連中央執行委員会決定により、アゾフ＝黒海地方はクラスノダール地方とロストフ州に分割された。[58] 次いで、九月二二日付決定はウクライナの四つの州の分割を定めた。すなわち、ハリコフ州はハリコフ州とポルタヴァ州に、キエフ州はキエフ州とジトミル州に、ヴィンニツァ州はヴィンニツァ州とカメネツ・ポドリスク州に、オデッサ州はオデッサ州とニコラエフ州にそれぞれ二分された。また、これに関連して、ドニェプロペトロフスク州の九つの地区がニコラエフ州に移管されることが定められた（同時に、これまで存在した六つの管区も廃止された）。翌日の九月二三日付決定は、北部州をヴォログダ州とアルハンゲリスク州に分割するとともに、レニングラード州の一三地区をヴォログダ州に編入する旨定めた。九月二六日付決定では、東シベリア州がイルクーツク州とチタ州に、またモスクワ州がモスクワ州、トゥーラ州およびリャザン州に分割された（同時にヴォロネジ州の一三地区がリャザン州に移管替えとなった）。さらに九月二七日には、西部州とクルスク州の両州にそれぞれ属する三二地区と二六地区を合わせてオリョール州を新設することが定められた（その際、西部州はスモレンスク州と名前が変更された）ほか、ヴォロネジ州がタンボフ州とヴォロネジ州に分割され、同時にクィブイシェフ州の二三地区がタンボフ州に編入された。そして最

後に、九月二八日付決定で、西シベリア地方がノヴォシビルスク州とアルタイ地方に二分された。[59]

これは、まさに行政区画の再編ラッシュといってよい。これら一連の九月の決定により、一九三六年一月現在、全国で三一あった地方と州のうち一二が分割され、三つの州も事実上の分割というべき地区の移管によって領域を縮小することとなった。

分割対象となった地方党委員会の議事録を見る限り、分割は事前には彼らに知らされず、決定は地方にとっていわば青天の霹靂であったと考えられる。たとえばアゾフ＝黒海地方においては、決定直前の九月九日、地方党委員会ビューローは九月二五日に党委員会総会を召集することを決めたが、決定を受けた後の九月二〇日、急遽、党委員会総会の延期と報告者の変更（報告予定者の赴任による）を確認した。また、分割決定の二日後、新設されるクラスノダール地方に異動する活動家の住宅その他の問題を調査・検討する委員会の設置や、分割にともなう事務や書類の整理などが「もち回り」で決定されたことからも、分割決定が地方にとって突然であったことが分かる。[60]

分割にともなって指導部の配置転換が大規模に行われたことはいうまでもない。地方指導部は党中央のノメンクラトゥーラ（人事権）に属しており、九月一六日、党中央は中央から派遣する者を含め、クラスノダール地方に異動する者とその空席を埋める者、計一二名を任命した。これは二日後、ロストフ州党委員会ビューローで「もち回り」決定された。さらに党中央は、州執行委員会議長など、特定の職については特別の指示を与えた。[61] 分割を契機に、州の最高指導部が改めて党中央の点検を受け任命されたわけである。もちろん、党中央の決定とは別に州党委員会も独自にクラスノダール地方に派遣する活動家を決定した。それによれば、概して、アゾフ＝黒海地方で「代理」あるいは副次的な活動に就いていた者が指導職に派遣された。彼らにとって分割は昇進を意味した。

地方分割の意義について、たとえば『クルスカヤ・プラウダ』社説は次のように解説した。すなわち、クルスク州は

分割によって、地区の数が九二から六七に減り、「州装置は地区、村ソヴェト、コルホーズ、工場に近づくことになった。その結果、指導の一層の強化にとって大きな可能性を与えられた」。そして社説はこれに続けて、分割にともなう「組織化の時期」を、「あらゆる装置からトロツキスト＝ブハーリン主義者のスパイ、破壊分子などを容赦なく追放するため全面的に利用せねばならない」と論じた。[62] 地方の細分化は州から末端に至る上からの統制を強めるとともに、粛清を一層激化させる機会にもなった。

同時に、分割は州と地方の指導部にとっても重大な意味をもった。地方の全生活を掌握する立場にある地方の党指導部、とりわけ第一書記にとって、領域の縮小は彼ら自身の政治的比重ないし権限の縮小を意味する。しかも、人事についての党中央決定から明らかなように、分割は地方指導部に対する統制を強める機会を提供した。一九三七年初頭の地方指導者の更迭劇の背後にあった中央―地方関係をめぐる問題状況は、地方の行政区画の変更によって、これまで以上に中央の統制を強める方向で決着をみることになったと結論づけてよいように思われる。

もちろん、これによって、地方指導者に対する弾圧と「尻尾」批判がなくなったわけではない。「尻尾」批判は地方指導者を告発する重要な「論拠」の一つとしてこの後も広く活用される。その結果、失脚した指導者とかつて同じ地域で活動していた指導的活動家が、そのことを根拠としてテロルの標的とされた。たとえば一九三七年七月、マレンコフの「要請」を承けたサラトフ州第一書記クリニツキーは、シェボルダーエフと同時期、下流ヴォルガで活動していた指導的活動家一五名のリストを提出した。また彼はこれと同じ頃、サラトフ州の活動家を、旧下流ヴォルガ（サラトフ）、旧北カフカース（アゾフ＝黒海地方）および旧中央黒土州の活動家に分類したリストを作成し、中央に報告した。[63]

また、かつてシェボルダーエフを「尻尾」の論理で非難したエヴドキーモフ自身が、一九三八年六月、ロストフ州党委員会総会において「ピャチゴルスクからの尻尾」（「北カフカース人脈」）を非難された。[64]「尻尾」ないし「人脈」は、

地方指導者に対するテロルにおいて最も活用された方便であり、また「基準」の一つでもあった。

以上のように、一九三七年初頭に発し、二―三月総会で大々的に組織された地方指導部批判は、行政区画の変更を含む中央―地方関係の再編に帰結したと同時に、地方の指導者層に対する弾圧の「論理」を提供したという意味において、その後展開されるテロルの出発点をなしたといえよう。

おわりに――安定のもとでのテロル

本稿は大テロルの一側面である地方指導者に対するテロルを、中央―地方関係という視点から考察してきた。十分な論証がなされたとは到底言えないが、当時の中央―地方関係には、スターリンら党中央の眼からみて重大なボトル・ネックが存在したというのが、本稿の提示した仮説であった。そして党中央が認識したボトル・ネックとは、地方指導部の「一体性」および「情報隠蔽」と個々の「敵」に対する「庇護」であった。

すでに本論で指摘したように、地方指導部が政策履行において様々な「逸脱」を犯し、不都合な情報を「隠蔽」しようとすることは、一九三〇年代後半に限られた現象ではない。では、なにゆえ一九三六年から三七年にかけて地方指導部の「隠蔽」が特別に非難の対象となったのであろうか。本稿はその要因として、個々の「敵」の摘発に対する地方指導部の消極姿勢を指摘したが、同時に、この問題はより広い文脈のなかで、すなわち地方党組織の政策履行をめぐる環境の変化との関連でも考えなければならないように思われる。この点を考えるにあたって注目に値するのは、地方指導部批判において「隠蔽された事実」といわれたものが、農業カンパニアの目標からすれば、それ自体としてはあまり政治的重要性をもたない事柄であったことである。

「上からの革命」という政治的変動期や一九三二―三三年のような体制の危機に直面した時期にあっては、集団化や

穀物調達、農民の抵抗やそれを背景にした下級党機関の「サボタージュ」の打破など、その時々において中央が課す最重要課題を達成することこそが地方指導部の第一義的任務であり、その課題を達成する限りにおいて、地方指導部はかなりの裁量の余地をもっていたといってよい。換言すれば、地方指導部は中央―地方関係においてある程度の自立性をもち、中央の決定作成に影響を及ぼす場合もあったのである。これはすでに奥田央氏の研究が明らかにしたとおりである。氏は中流ヴォルガ地方を対象として、地方の要求を受けた党中央による調達計画の削減や、「行きすぎ」など個々の問題をめぐる中央と地方の対抗など、地方指導部がある程度の自立性をもった一九三〇年代前半の中央―地方関係のダイナミズムを実証的に明らかにしたのであった。(65)

第一義的任務を達成するうえで生じる「副次的な」分野での「逸脱や歪曲」は、少なくともその最重要課題が達成される限りにおいて、非難の対象となるにせよ、地方指導部の致命的な誤りとされることはなかった（何が副次的かという判断はそれ自体が中央に属しており難しい問題が生じるが、この点はひとまず措く）。党中央が地方指導部による重要課題の達成に不安感あるいは危機感を覚えるとすれば、「副次的な」問題で彼らを更迭することはできなかったというべきであろう。

これに対して、たとえばクルスク州党委員会が「隠蔽」を非難された事実は、適法性やコルホーズ定款の侵犯など、これまでの「慣行」ないし「基準」からすれば、「副次的な」分野に属する事柄であった。いわば「建て前」に属する事柄が地方指導部全体を断罪し、更迭する口実となったわけである。これは政策履行をめぐる問題状況が一変したことを意味する。すなわち、穀物調達などこれまでかろうじて達成されてきた最重要課題が、この頃には、多大な困難をともないながらも確実に遂行される態勢が整い、その結果、党中央にはそれまで第二義的に扱ってきた「逸脱」を問題視して、地方党組織の活動を整序する余裕が生じた。体制に対する安定感が党中央に生まれたといってもよい。一九三五

年一月末から開催された第七回全連邦ソヴェト大会で、「民主主義化」の方向を強調した憲法改正が発議されたのも、「社会主義の勝利」という党中央の認識に基づくものであった。[66]

事実、一九三二年末からの飢饉を背景にした体制の危機は三四年半ばまでにはひとまず終息し、これ以後スターリン体制は相対的な安定期を迎えたといってよい。一九三二年末の体制危機の産物であった非常機関、MTC政治部は三四年に廃止され、党とソヴェト機構を主体とするという意味で「通常の」統治機構の再編・整備がめざされた。[67] また翌三五年にはコルホーズとソフホーズが全国耕地面積の九〇%以上を覆うまでに組織され、農業集団化は基本的に完了した。もちろん、すでに触れたように、一九三六年の農業生産は深刻な不作を記録し、多くの農業指導者が摘発、追放された。しかし一九三六年の場合、飢饉はかつてのように大規模化せず、また一層重要なことに、一九三二—三三年の農業カンパニアで現出した現地党組織の抵抗と遠心化という危機的事態は回避された。

体制の安定化は、党中央に対して、改めて中央—地方関係の再検討を行わせる可能性を与えたであろう。一九三七年二—三月総会でマレンコフが述べたところによると、一九三五年一月、党中央委員会書記局は地区と市の党委員会書記をノメンクラトゥーラに取り上げ、その構成を点検した。その結果、七七〇人が書記として不適格であると判断されたという。[68] 地区レヴェルへの党中央ノメンクラトゥーラの拡大は、特殊にはMTC政治部廃止と地区の分割にともなう政治部長の異動や、新設される地区の党書記任命への対応策であったが、同時に、より一般的には中央による統制強化の表れであると位置づけることができよう。

中央による統制強化がめざされるとすれば、地方指導部の「情報隠蔽」と「一体性」は、中央にとって打破すべき最大の問題となる。その際、地方指導部が示す様々な「建て前からの逸脱」は彼らに対する恰好の非難材料となろう。党内外の民主主義や適法性などの原則が、中央による統制強化のための「建て前」として最大限利用されることになる。

以上のように、一九三六―三七年になされた地方指導部非難には、「社会主義の勝利」と体制の安定化のもとで中央―地方関係を再編しようとする党中央の意図が込められていたとみることができる。繰り返せば、この再編は、「敵」の摘発に対する地方指導部の消極姿勢を媒介として、彼らに対する大量弾圧に帰結した。かくて、民主主義の強調（政治的安定）のもとでのテロル（政治的流動）という、外見上、逆説的な現象が生まれるに至ったと考えることができよう。

しかし、中央―地方関係の再編に由来した大量弾圧は、地方指導部を壊滅状態に追い込み、逆に地方指導部の機能不全をもたらした。たとえば、ロストフ州のある指導者は一九三七年一一月の州党委員会総会の席上、次のように苦情を述べた。「州党委員会ビューローの活動には、ビューロー員がビューローで生じていることに答えられないような事態が生まれている。…たとえば、昨日、三人の地区委員会書記から元出版部長のことを聞かれたが、ビューロー員である私は知らないとしかいえなかった。…ゲラシモフはどうしたのか。どうなったか、誰も知らない。（会場から、病気だとの声）ゲラシモフは最近、装置に来たばかりなのに、もういなくなっている。…このような状況で、ビューロー員はビューローに対して責任を負えるだろうか。」(69)

こうした状況はロストフ州に限られた現象ではない。大量弾圧の結果、地方指導部が機能不全に陥ったとすれば、党中央は遅かれ早かれ事態の修復を図らざるをえないであろう。地方指導部に対する弾圧がいかなる経過を辿り手直しに至ったか、これについては別途に検討しなければならない。

（1）**Известия ЦК КПСС**, No. 3, 1989, c. 137. 志水速雄訳『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」全訳解説』（講談社、一九七七）、四五頁。

（2）**Там же**, No. 12, 1989, c. 86.

(3) **Вопросы истории**, No. 2, 1992 - No. 11-12, 1995.

(4) **Известия ЦК КПСС**, No. 3, 1989, c. 140. 志水速雄訳、前掲、五五頁。

(5) R. Conquest, *The Great Terror* (Pelican Books, 1971), Ch. 6, pp. 267-269. 片山さとし訳『スターリンの恐怖政治』上（三一書房、一九七六）、第六章、二二〇—二二二頁。コンクウェストは大テロルをキーロフ、オルジョニキーゼ、ポストゥィシェフら穏健派とスターリン派との対抗という文脈で把え、フルシチョフが引用した二—三月総会におけるポストゥィシェフ発言を、穏健派の主張の典型と位置づけている。

(6) J. A. Getty & R. T. Manning, eds., *Stalinist Terror : New Perspectives* (Cambridge U. P., 1993), p. 56, fn. 65.

(7) **Вопросы истории**, No. 5-6, 1995, c. 4. ; **О. V. Хлевнюк**, *Политбюро : механизмы политической власти в 1930-е годы* (M., 1996), c. 219-221.

(8) J. A. Gettey, *Origins of the Great Purges : The Soviet Communist Party Reconsidered, 1933-1938* (Cambridge U. P., 1985).

(9) J. A. Getty & R. T. Manning, eds., *op. cit.*

(10) **Д. А. Волкогонов**, *Триумф и Трагедия : политический портрет И. В. Сталина.* **В** 2-х **книгах** (M., 1989). 生田真司訳『勝利と悲劇』上下（朝日新聞社、一九九二）。

(11) **О. В. Хлевнюк**, *1937-й : Сталин, НКВД, советское общество* (M., 1992) ; *Сталин и Орджоникидзе : Конфликты в Политбюро в 30-е годы* (M., 1993) ; *Политбюро : механизмы политической власти в 1930-е годы* (M., 1996). また、彼が中心になって史料集、*Сталинское Политбюро в 30-е годы. Сборник документов* (M., 1995) を編纂されている。

(12) これらは編者であるゲッティのいくつかの論文で端的に示されている。Getty & Manning, eds., *op. cit.*, pp. 14-15, 56, 61-62, 245-246.

(13) ただし、これへのスターリンのコメントは記されていない。**Известия ЦК КПСС**, No. 8, 1989, c. 82. しかし、この時点でなにゆえ、旧反対派を肉体的にも抹殺しなければならなかったか、彼らを一掃しなければならないとスターリンが判断するに至った客観的必要性とは何か、あるいは、旧反対派を一掃することによってスターリンが解決しようとした政治的・経済的矛盾は何か、という問題は残る。

(14) **Хлевнюк**, *1937-й : Сталин, НКВД, советское общество*, c. 76-90 ; *Политбюро : механизмы политической власти в 1930-е годы*, c. 193-198.

(15) たとえば、二—三月総会におけるスターリン演説を参照。**Вопросы истории**, No. 3, 1995, c. 11.

(16) J・シェクター&V・ルチコフ編、福島正光訳『フルシチョフ・封印されていた証言』（草思社、一九九一）、四八—五六頁。

(17) ヴォルコゴーノフ、前掲訳書、上、五一九頁。

(18) 「複合現象」という言葉は塩川伸明氏の示唆による。活動上の何らかの「欠陥」が、「破壊活動」の名のもとに弾圧の重要な原因となったことは大テロル期に限られないが、生産上のあらゆる欠陥の解決方法をテロルに見いだす思考様式は大テロルの高潮のなかでますます強まった。たとえば党政治局員・書記アンドレーエフは、一九三七年一二月、スターリンに宛てて次のようなテロルの提言を行った。すなわち、「毎年、農作業がたけなわになると、トラクター、コンバインその他の農業機械の予備部品の不足や、燃料供給上の混乱という同じ現象が繰り返されている。私はこうした事態をヴォロネジでも、クルスク、サラトフ、クイブィシェフでも目にした。農業人民委員部、機械製作人民委員部系列の装置で破壊活動が行われていることは間違いない。…ＭＴＣへの予備部品と燃料の供給に従事する組織から破壊分子と疑わしい分子を粛清する必要があろう」。こう述べてアンドレーエフは、「㈠農業人民委員部と工業関係の人民委員部で予備部品と燃料の供給状態がどうなっているか点検し、秩序を回復するための提案を党中央委員会に提起すること。㈡ＭＴＣに予備部品と燃料を供給する組織の人的構成を点検し、敵対分子、信頼できない分子を粛清すること」を自分に委ねてくれるよう、スターリンに提案した（**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 293, л. 21）。

生産上の失敗に加え、過去の経歴も**НКВД**による弾圧の重要な根拠であった。たとえば、恐らく一九三七年末であろうが、ロストフ州の労働者グループがアンドレーエフに宛てた手紙は、次のように訴えた。「多くの労働者、古くからのカードルが運輸から工業に移った。人民の敵にされたくないというただそれだけの理由で。何か些細な職務上の過失があると、白軍支配下にいた労働者は、それだけでおしまいになる。…次のような印象を受ける。白軍の地域にいた労働者は、ソヴェト政権のもとでは五～一〇年の刑期を勤めなければならない。これは資本主義に対する報復だ、という印象である。この印象は正しくないが、今、そのような方法で敵が捜されているのだ。…**НКВД**機関は…現在の企業、生産現場の実情を調査せず、二〇年前のことを取り上げている。」（**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 284, л. 30-33）。

(19) 拙稿「大テロル下ソ連農村の政治過程――一九三六年の農業不振とアゾフ＝黒海地方――」『スラヴ研究』一九九一年第三八号、一〇一―一〇二頁。ここで筆者は、シェボルダーエフら指導者の解任が一九三六年の農業生産の失敗に対する責任追及であり、この農業生産の失敗が、一九三七年に大テロルが始まる重要な要因の一つであったと主張した。本稿では議論の幅を広げ、中央―地方関係という枠組みで地方指導部に対する弾圧について検討する。

(20) **Вопросы истории,** No. 7, 1995, с. 15; No. 10, 1995, с. 12. **Хлевнюк,** *Политбюро,* с. 216-217.

(21) **Вопросы истории,** No. 7, 1995, с. 21.

(22) 食糧援助を放出しなかったのは、地方指導部に潜入した「人民の敵」が「破壊活動」を企てたからだ、という告発の報告である。党統制委員会党参与会書記ムルジンからスターリンおよびエジョフ宛、一九三七年八月二二日付報告。**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120,

Д. 285, **л.**40.

(23) 拙稿、前掲、九二―九四頁。

(24) **Вопросы истории**, No. 4, 1995, с. 4.

(25) **Там же**, No. 7, 1995, с. 16-17.

(26) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 292, л. 114.

(27) 演説が新聞の二頁全体にわたるのに対し、草稿はタイプ印刷で三枚しかない。ただし、アルヒーフに残されたものは、草稿の一部の可能性もあるので、確定的なことはいえない。

(28) **Курская правда**, 11 января 1937 г., с. 1.

(29) ヤコヴレフの演説草稿については、**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 292, л. 69-71. また、彼の演説については、**Курская правда,** 12 января 1937 г., с. 2-3 を参照。

(30) **Вопросы истории**, No. 5-6, 1995, с. 21.

(31) *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК*, Том 6 (М., 1985), с. 379-381.

(32) たとえば、**Правда**, 29 июля 1936 г., с. 3.

(33) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 280, л. 6.

(34) **Там же**, л. 13.

(35) **Вопросы истории**, No. 10, 1995, с. 7.

(36) **Там же**, No. 4, 1995, с. 11.

(37) **Там же**, No. 7, 1995, с. 20. ポストゥィシェフは革命時から一九二六年まで極東と東シベリアで活動した。

(38) **Там же**, No. 10, 1995, с. 12.

(39) **Там же**, No. 7, 1995, с. 12, 19-20 ; No. 8, 1995, с. 8.

(40) **Правда**, 29 декабря 1936 г., с. 3 ; 17 января 1937 г., с. 2.

(41) **Вопросы истории**, No. 10, 1995, с. 9.

(42) **Там же**, No. 11-12, 1995, с. 13. また、スターリンは「自分に献身的な友人」を重視する態度と関連づけて、オルジョニキーゼが生前、トロツキストのロビナーゼを擁護していたと批判した。

(43) **Правда**, 6 августа 1936 г., с. 3 ; 19 августа 1936 г., с. 3.

(44) **Вопросы истории**, No. 12, 1994, с. 18.

(45) **Хлевнюк,** *Сталин и Орджоникидзе*, с. 86-90.
(46) 拙稿、前掲、一〇六頁。フレヴニュークは、アゾフ＝黒海地方における「人民の敵」摘発の不十分性に関連して、地方第一書記シェボルダーエフが一二月三一日、スターリンに召喚されたと指摘している（ただし、そこでの討議の内容については不明であるという）。**Хлевнюк,** *1937-й*, с. 95.
(47) シャフティ市委員会書記リュバルスキーは後に逮捕された。**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 280, л. 4. 党組織と**НКВД**との対抗という構図をここに見いだすことができるが、この問題については今後の検討に委ねたい。
(48) **Курская правда,** 8 июня 1937 г., с. 1.
(49) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 289, л. 54.
(50) **Курская правда,** 14 января 1937 г., с. 1.
(51) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 21, д. 3687, л. 51.
(52) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 280, л. 123-127.
(53) 党中央委員会がこれを受理したのは一九三七年八月二日である。**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 284, л. 41.
(54) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 21, д. 3693, л. 68-69.
(55) しかし、ゴルキンはテロルの波を生き延びることができた。**РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 285, л. 292. 告発については、たとえば、**там же,** л. 56, 70.
(56) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 289, л. 4, 19-21, 40, 47-50, 51, 68-73.
(57) ポストゥィシェフの最終的な失脚については、**Хлевнюк,** *Политбюро*, с. 224-228 参照。
(58) ただし、この決定は、ロストフ州に編入すべき地区に遺漏があった（三地区が脱落していた）との理由で取り消され、九月一三日、新たに決定が下された。ソ連中央執行委員会の決定に先立って、これに相当するロシア中央執行委員会決定がある。他の州と地方についても同様である。
(59) 拙稿、前掲、一〇八頁。
(60) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп.. 21, д. 2218, л. 34, 54, 64.
(61) **Там же,** л. 66-67.
(62) **Курская правда,** 28 сентября 1937 г., с. 1.
(63) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 120, д. 289, л. 42-46. ちなみに、旧中央黒土州はワレイキスが長年、第一書記として君臨していた地方であり、彼が一九三七年一〇月総会で党中央委員会から追放されたことを考えると、旧中央黒土州の活動家リストが報告されたことは、

このころすでにワレイキス非難の動きが党中央にあったことを示唆する。このリストが、彼とかつての同僚たちに対する告発の資料として使われたことは想像に難くない。

(64) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 21, д. 3687, л. 51.

(65) 奥田央『ヴォルガの革命――スターリン統治下の農村』(東京大学出版会、一九九六)、とくに第一章、二章、四章、六章。

(66) モロトフ報告'**Правда**, 29 января 1935 г., с. 5; 7 февраля 1935 г., с. 2. また、「生活はよくなった。生活はより楽しくなった」という一九三五年一一月の有名なスターリンの定式も、単に生産への動員とノルマの引き上げを正当化するためのデマゴギーであるのみならず、体制に対する安定感を表したものとしても把えるべきであろう。**Там же**, 22 ноября 1935 г., с. 1.

(67) 拙稿「スターリン政治体制下の農村における統治体制の再編――一九三一年―一九三四年――」『スラヴ研究』一九八二年第二九号、九六―一一七頁。

(68) **Вопросы истории**, No. 10, 1995, с. 7. 富田武「三〇年代のソ連」、和田春樹他編『講座スラブの世界・第三巻　スラブの歴史』(弘文堂、一九九五)、三四八頁。富田氏はここで、大テロルの背景に人事をめぐる「党中央と地方党の組織利益の対立」があったと指摘している。

(69) **РЦХИДНИ,** ф. 17, оп. 21, д. 3693, л. 256-257. ちなみに、ロストフ州では、一九三七年六月から一一月の党委員会総会までの間に、州委員会ビューロー員として残った者は九名中三名、また候補は四名中二名だけであったという。**Там же**, л. 56. なお、六月総会選出のビューローの構成については、**Молот**, 18 июня 1937 г., с. 1 参照。

〈追記〉本稿脱稿後、各種のアルヒーフ史料を系統的に収集、分析した富田武氏の労作、『スターリニズムの統治構造――一九三〇年代ソ連の政策決定と国民統合』(岩波書店、一九九六)に接した。富田氏はこの書で、本稿注(68)に注記した論点をさらに敷衍して論じている。この研究から学ぶべき点はきわめて多く、本稿における議論も整理、修正を必要とするが、その作業は後日を期したい。